



2022年への

ETUDE ② 家庭科の学びのあるべき姿

VIEW POINT

新型コロナウイルスの流行で、「幼児との交流」は感染リスクの高い活動（文部科学省「学校の新しい生活様式」2020.12）に位置付けられた。しかし、その中でも、自立に向けた必須の技能としての学びを継続している例もある。京都府立洛北高等学校の竝川幸子先生にその狙いと工夫を紹介してもらった。

「家庭基礎」

体験学習「乳幼児との交流」～コロナ禍における工夫を講じて～

京都府立洛北高等学校 教諭 竝川 幸子

1 はじめに

これまで継続実施してきた乳幼児との交流は、今年度もコロナ禍の中、児童館の協力を得て行うことができた。ここでは、乳幼児との交流に特化して、コロナ対策等も含め紹介する。

2 食家庭科の学びを通して

開乳幼児との触れ合いにはいくつもの学びがあるが、「これまでの自分・現在の自分・これからの自分」について考えさせる視点は特に大切にしたいと思い、必修科目「家庭基礎」において1年生全7クラスが触れ合い学習を実施して10年が経った。乳幼児との交流先は、本校から徒歩10分程度で移動できる京都市葵児童館である。これまで児童館と協議しながら実践を積み上げ、一定の形が出来上がった。

しかし、今年度は、新型コロナウイルス感染症の影響から交流は難しいかと思案していたところ、児童館の渡邊洋子館長から、「お母さん方も楽しみにされているので、これまでとは少し形を変えて実施しませんか。」との申し出があり、その言葉に後押しされて実施を決意。コロナ対策等も含め内容を協議・検討し、体験学習「乳幼児との交流」を今年度も行うことができた。そして、コロナ禍の中、生徒が子どもや母親を思いやる新たな発見がそこにはあった。

3 コロナ禍における変更点

新型コロナウイルス感染症対策として、「3密」を避けること。乳幼児との直接的な体の触れ合いを避けること。この2点を大きな柱として、次に示すように従来と内容を変更した。

	今年度（令和3年1・2月実施）	昨年まで
交流時間	11:00～12:00 → 帰校 交流時間を短縮 ※コロナ感染のリスクを減らす	11:00～12:30 アンケート記入後、帰校
児童館到着時	（登校時、検温必須、マスク必須） 手洗い ※手指の消毒（アルコールスプレーは本校から準備） 	（体調確認） 手洗い 
使用教室	児童館到着後から、2部屋に分かれる ※密を避ける 	ひとつの部屋で、みんなで交流 

	今年度（令和3年1・2月実施）	昨年まで
体操	<p>手遊び体操 音楽に合わせて指や腕を使って体操 ※乳幼児との体の接触を避ける</p> 	<p>赤ちゃん体操 音楽に合わせて全身を使って体操 乳幼児と触れ合う第一歩 中には乳幼児の体をくすぐる曲もある</p> 
読み聞かせ 触れ合い	<p>予め決めた班毎に読み聞かせをする 子どもとは距離をおいて座る ※密になること、体の接触は避ける ※絵本は内容が短いものに限定（時間短縮） ※絵本の消毒</p> 	<p>乳幼児がくじをひき、読み聞かせ班を決定 乳幼児の傍で読み聞かせをする 乳幼児をだっこしたり、膝の上に乗せる</p>  
DVD 視聴	<p>交流時間短縮の対応策 ※コロナ禍対応 （子どもの行動や母親・父親の言葉を事前に児童館が撮影）</p> 	<p>交流時間内はずっと乳幼児と一緒に遊ぶ</p> 
自由遊び	<p>時間設定なし ※交流時間短縮のため</p>	<p>交流プログラム終了後、自由に遊ぶ</p>  
振り返り	<p>学校に戻りアンケート記入 引き続き交流についての振り返り</p>	<p>後日、授業で振り返り</p>

4 体験学習「乳幼児との交流」における指導計画

乳幼児の観察や遊び等の実践的・体験的な学習を通して、乳幼児に関心をもたせ、子どもが育つ環境や適切な保育の重要性を理解させる。また、子どもを生み育てることの意義について認識させることを学習のねらいとしている。

体験学習を行うにあたり、事前学習・体験学習（交流）・事後学習を計画し、次のような内容で進めた。

(1) 事前学習－講習（50分間：洛北高校）

ア 講習内容

体験学習をより充実したものとするため、事前学習を実施。館長から世界やわが国の子どもたちがおかれる状況や児童館の役割、子どもと関わる仕事のやりがい等を中心に説明。次に児童館厚生員（職員）から交流プログラムの内容やその準備内容について説明後、生徒は指示に従ってグループ毎に準備。

渡邊館長の講話



交流プログラムは、主に児童館が内容を計画。児童館に来館する乳幼児の年齢は、日によって異なる。同じプログラムでも対象乳幼児が違うため、内容が重複するものもある。プログラムの内容は、次のとおりである。

全クラス実施

・手遊び体操
（生徒が童心に戻ることができ、乳幼児との交流のきっかけにもなる。）

二口厚生員の手遊び体操指導



- ・絵本の読み聞かせ
(話をゆっくり聞かせつつ、乳幼児の様子を観察する。)

各クラス実施（竝川担当クラスは※を実施。）

- ・今日のアльバム作り ※
- ・カラーポリ袋で遊ぼう ※
- ・お母さんとのおしゃべりタイム※
- ・節分遊び 鬼さんが逃げた

イ 準備の様子

交流グループの確認



読み聞かせの絵本を選択



アльバム作りのメッセージを作成



カラーポリ袋を繋ぎ合わせ



お母さんへの質問を考える



生徒の質問内容をまとめる石井厚生員



(2)

ア 体験学習－乳幼児との交流

(11:00～12:00 於：葵児童館)

【今日のアльバム作り】

足型をとる



身長計測



アльバム完成



体重計測



アルバム作成中



子どもも興味津々



【カラーポリ袋で遊ぼう】

お絵かき中



空気入れ



膨らんだポリ袋でお遊び中



ポリ袋の下をくぐってお遊び中



お母さんへメッセージ作成中



生徒からのお母さん方へメッセージ



【お母さんとのおしゃべりタイム】

サイコロを振って質問を決定



生徒もお母さんたちも真剣に話し、耳を傾ける



イ 振り返り（12：25～12：40 於：洛北高校）

児童館から帰校後、更衣を済ませ家庭経営室に集合、アンケート記入や意見交換等、振り返りを行う。



5限目が体育なので更衣せずに振り返り



（3）事後指導－講話（1時間：洛北高校、授業時間の関係から、竝川担当クラスのみ実施）

子育て中の男性教員や女性事務職から子育て論や子どものかかわり方等についての講話。男性教員は、子育て論（夫婦の役割）や子育ての大変さ、楽しさ等について子どもの成長を記録した動画とともに説明。

桑原典子事務職員による講和



山口敬司教諭による講和



吉田耕平教諭による講和



4 児童館館長及び厚生員（職員）の方々の思い

地域の中で、人と人を繋げることを意識した機会を作ることは重要になってきています。

この交流会を通して、お母さんたちは、我が子に一生懸命接してくれる高校生の姿を見て、10年後の我が子の成長を見通しながら、子育ての励みになっています。

乳幼児は、家庭とは異なる環境の中、父親・母親以外の人と触れ合うことにより、新たな刺激を受け、それに対応するか自身の中で模索し見つけ出して、新しい自分の一面を切り開いていきます。実際に、高校生と一緒に遊ぶ中で、日頃見たことのない表情や反応が見られたり、初めてのことでも高校生にリードされて体験できた場面が多く見られています。このような体験が乳幼児の社会性を身に付ける上での豊かな土壌に繋がっています。

高校生は、乳幼児を愛おしく感じるのはもちろんのこと、思い通りにコミュニケーションのとれない乳幼児がある意味とても新鮮であり、新たな自分の一面を発見する機会にもなっていることと思います。

今回は接触を避ける必要から、直接的な関わりは少なくなりましたが、出会いと触れ合いを通して、ともに時間を過ごすことができたことは、有意義であったと思います。

5 生徒の感想・主な感想を抜粋

・泣いたり、泣きやんだりするその姿がかわいくて、更に子どもに対して関心を持つようになりました。

・実際に小さな子どもと関わって、もっと成長の過程等を知りたいと思いました。

・乳幼児は、日に日に進化して、できることが少しずつだけ増えていくことを実感しました。お母さんひとりで子どもを育てるのは大変なので、家族で協力して子育てをする必要があることを学んだので、これから役立っていきたいと思います。

・子育ての大変さをしっかり学ぶことができ、僕ら男性は赤ちゃんを産めない分、子育てや配偶者のサポートをする大切さを知ることができました。

・子どもが健康ですくすく成長するためには、周りの助けが大切であることが分かったので、地域の乳幼児とそ

のお母さんやお父さんに関わりたいと思いました。

・子育ては家庭だけでなく、地域ぐるみで行うことだと感じました。

・今まで知らなかった子育ての大変さを実際に体験したり、法律面（児童福祉法や育児休暇等）からも子育てについて知ることができ、理解が深まりました。

6 まとめ

生徒の感想にあるように、学びの多い有意義な時間をもつことができた。

交流後のアンケート中に、生徒の状況を数値化できるよう次の3項目を含め、理由も尋ねた。

- ① 授業や交流を通して、乳幼児に関心を持つようになりましたか。【なった ならなかった】
- ② 授業や交流を通して、子育てに対する理解が深まりましたか。【なった ならなかった】
- ③ 乳幼児とまた一緒に遊びたいと思いますか。

【思う 思わない】

竝川が担当する3クラスは、①②ともに全員が【なった】と回答。ところが、③の項目について、「また一緒に遊びたいと思わない」と、8名（6.7%）の生徒が回答した。「意思疎通ができない。泣いた時にどう対処すればよいのかわからない。」「関わり方がよく分からないので、乳幼児を退屈させてしまい申し訳ない。」といった遠慮がちな生徒や、「子どもと遊ぶより、自分のやりたいことに時間を使いたい。」と、自分の時間を優先する生徒もいた。しかし、「コロナが感染拡大している間は交流は無理。」「さすがにもう一度交流するとなると感染が心配。身内ならもっとそのように思うはず。」と、乳幼児へのコロナウイルス感染を懸念、母親の気持ちを察する声もあり、コロナ禍という現状の中、真に子どもを思いやる生徒の気持ちが伝わってきた。

葵児童館との触れ合い学習は、1年目は生徒による絵本の読み聞かせと児童館から提示されるプログラムを中心に交流。2年目はプログラムの内容に赤ちゃん体操と事後学習「男性の子育て論」を加えた。3年目は事前学習を加え、4年目は事後学習の講話内容を充実させた。また、この交流を通して本校卒業生や生徒会執行部の生徒が葵児童館でボランティア活動を行う等、これまでの様々な積み重ねがあり、だからこそコロナ禍においても、児童館や乳幼児の保護者の協力があるのだと生徒には伝えられている。

「こどもの発達と保育」における学習内容には、乳幼児との交流の他に、妊婦体験や産婦人科医の講義、保育者へのインタビュー等、一連の取組を行っている。これらが生徒のこれからの生き方・考え方に繋がり、それぞれの行動に結びつくことを心から願う。

また、コロナ禍だからと色々なことを諦めてしまうのではなく、実施できる方法を模索していく力を家庭科の授業から学びとり、今後の自分の生活にも生かして欲しいと願う。

最後に、新型コロナウイルス感染症の影響を受け、乳幼児との交流は不可能かと考えたこともあったが、葵児童館や乳幼児の保護者等の協力があり、こうして実施できたことに心から感謝する。